講談社 青い鳥文庫

—ヒゲさんの動物人生—

ボクは動物少年だい!

吉村卓三　絵・青木宣人

講談社 青い鳥文庫　125-1

ボクは動物少年だい！

吉村卓三

定　価　420円

昭和63年4月10日　第1刷発行

発行者　加藤勝久

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112

電話　東京（03）945-1111（大代表）

N.D.C. 913　220p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社

© TAKUZÔ YOSIMURA 1988

Printed in Japan

ISBN4-06-147241-0（0）（児A）

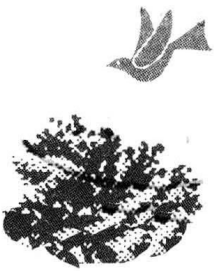
（落丁本・乱丁本は，講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。）

■この本についてのお問い合わせは，講談社児童局「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

—ヒゲさんの動物人生—

ボクは動物少年だい！

吉村卓三　絵・青木宣人



講談社 青い鳥文庫

もくじ

プロローグ　真夜中の動物園――5
第一章　わんぱく少年　卓ぼん誕生――29
第二章　初代クロとの出会い――81

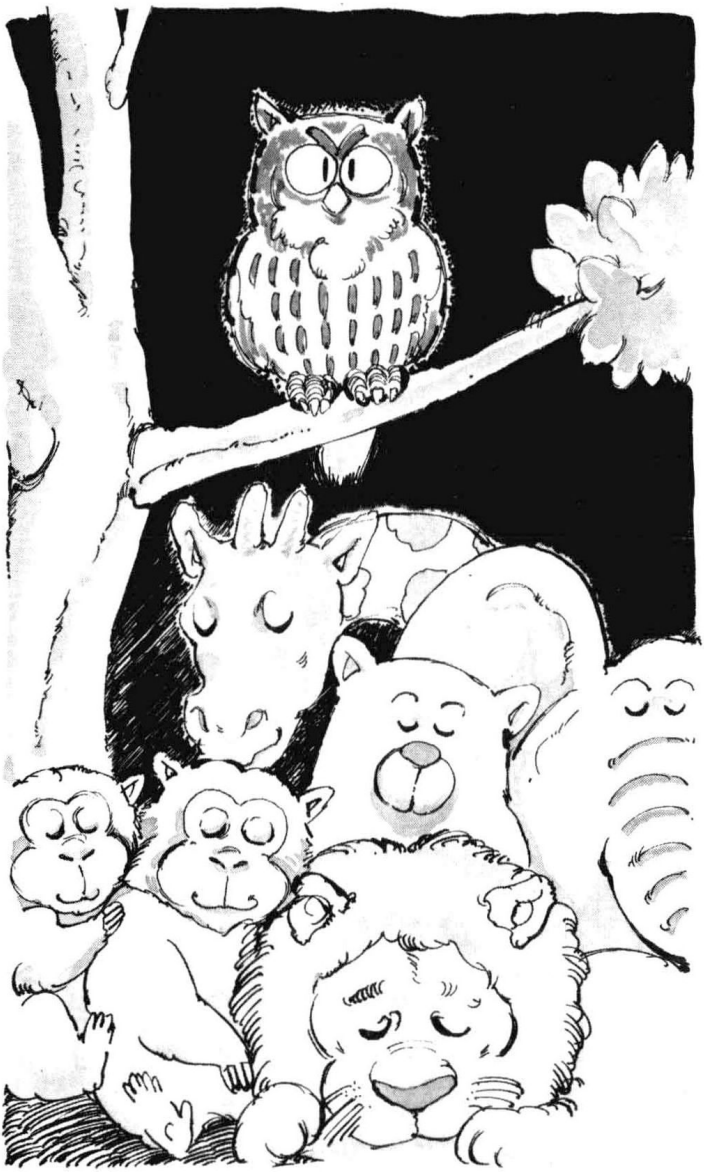
第三章　クロとのわかれ、そして旅立ち――145
エピローグ　二通の手紙、その後――199
■解説にかえて――215

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

プロローグ

真夜中の動物園

あたりは、しいんとしずまりかえっています。
時間はたぶん、夜中の二時をすこしまわっているころでしょう。
トラもチンパンジーも、子ウマもタヌキも、イヌもネコだって、みんなが、ねむりについている時間です。おそらく目をこらして周囲をうかがっているのは、ミミズクの〝チャゲ〟くらいなものだろうと思います。
ところで、みなさんは夜の動物園を、ごぞんじですか？
動物たちの鳴き声、子どもたちのわらいあう声や、おどろきの表情――。
「いたずらしちゃだめよ！」
なんていうおかあさんがたの子どもたちをたしなめる声――。
「これは、なんていう名まえ？　年は、いくつ？　どこからきたの？」
好奇心にあふれた子どもたちの質問ぜめに一つ一つ答えている係員の声、バックに流れ



る楽しい音楽――。

こんな、いかにも動物園らしい活気あふれる昼間の表情とはちがって、夜の動物園には、深い闇につつまれた生き物たちの静寂があるのです。

もちろん、昼間、元気にとびまわっていた子どもたちも、自分の手でえさをやり、自分の手で頭をなでた動物たちの夢を見ながら、それぞれのベッドで深い寝息をたてているにちがいありません。

動物園は動物と子どもたちのふれあう場所。話しあう場所。コミュニケーション＝ワールドでなければならないというのが、わたしの信念でした。

子どもたちは動物と接し、じかにふれることによって愛情を感じ、その愛をどう表現していったらいいのかを自然の中で学びます。

おっかなびっくり頭をなでる子がいます。すぐにえさをあたえようとする子がいて、動物たちの反応におどろき、泣きだしてしまう子もいます。どうしていいのかわからず、ただじっと見つめている子もいるのです。

そんなとき、わたしは、

「ねっ、かわいいでしょ。頭をなでてやってごらん。ちっともこわくなんかないんだよ。きみがかわいいなって思っていることを、動物もちゃんと知ってるから――。」

こんなふうに話しかけ、小さな手を動物たちの頭までもっていってあげるのです。頭をふれられた動物たちは、うれしそうに目を細めるのです。これはイヌやネコにかぎらず、タヌキだって、子ウマの〝ポニー〟だって、子ゾウの〝ジャンプ〟だって同じことなのです。

こうやってふれあった瞬間、かれらは友だち同士になれるのです。やさしく手をのばしたとき、かれらは、もう友だちになっているのです。

動物は、ことばをしゃべりません。だから子どもたちの手からえさを受けとっても、「ありがとう。」をいうことはできません。でも、感じることはできるのです。子どもたちのやさしさを感じ、そのやさしさにこたえることができるのです。

それは、目を細めることであり、尾をふってみせることであり、のどを鳴らしてあいさつするしぐさなのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

動物とのふれあいの中から、子どもたちは、いったいなにを感じることになるのでしょうか。

それは、大きなことばでいえば〝自分たちは人間なんだ、そして、人間も動物なんだ〟という、すなおな感想にほかならないだろうと思います。

かつてのわたしが、そうであったように、子どもたちは、みんな動物が好きで、動物は、かれらのすてきな友だちで、その友だちとの交流の中から、一つ一つ生命のふしぎを学んでいくことになるのです。

動物園は、わたしの夢でした。動物と子どもたちとのふれあい広場をつくる——これが、わたしの夢だったのです。

その夢が「移動動物園」という形で実現し、〝おヒゲの園長さん〟と呼ばれるようになっていたわたしは、昼間のそうぞうしさがさり、人間も動物たちも、みながねむりにはいる深夜、こうして一人、ひそかに動物たちを訪問するのが日課になっていたのです。

夜中の動物園なんて気味がわるい、と思う人がいるかもしれません。でも、けっしてこわいことなんかありません。

移動動物園は常設の動物園とはちがい、動物たちに会いたがっている子どもたちのもとに、動物たちを連れて旅をしなければなりません。ですから、小動物から猛獣にいたるまで、その健康管理には、じゅうぶん気を配らなければならないのです。

動物たちは、いつも健康でなければなりません。病気の動物がいれば、すぐに発見して治療してやらなくては手おくれになってしまうこともあるからです。手おくれで、もし……なんて悲しい思いはしたくありませんから、えさや適度な運動はもちろんのこと、夜中の見まわりは欠かすことができないのです。

動物たちは病気になったからといって、先ほども述べましたように、ことばでうったえることはできないのです。

でも、わたしは、少年のころから動物を家族として育ってきたために、動物たちと話をすることができるようになっていたのです。

だから、わたしが夜中に、かれらを訪問すると、体調のわるい動物は、かならず話しかけてくるのです。わたしは一ぴきだって動物たちを死なすわけにはいかなかったのです。

子どもたちのために動物たちを出前する、この移動動物園の主役は、園長であるわたしではなくて、動物たちだったのですから……。

夜中の訪問で、かれらが話しかけてくるのは、なにも病気のことばかりではありませんでした。

キタキツネの〝ジロー〟は、

「きょう、小さな女の子から、あまいお菓子をひとかけらもらったけど、ぼくは、どっちかっていうと、お弁当の中の卵焼きのほうがよかったなあ。」

なんていうわけです。だから、わたしも、

「それはざんねんだったな。おまえは雑食動物とはいっても、やっぱりチョコレートよりは卵焼きのほうが好きだもんな。」

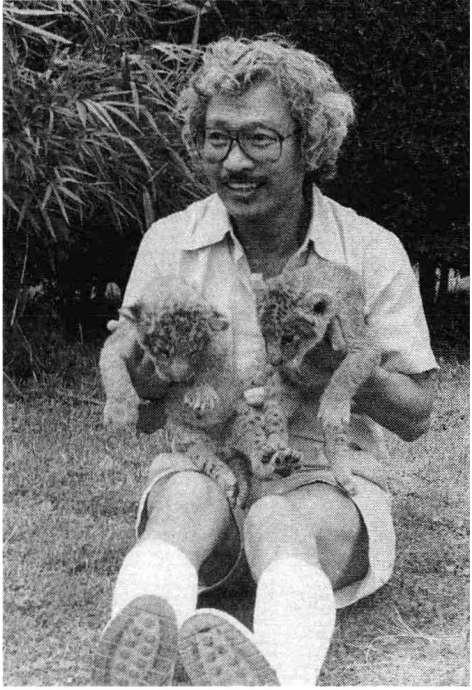
いつも、むやみにえさをあたえさせているわけではありませんでしたが、子どもたちには、時間を区切って動物たちにえさをあたえてもいいことにしていたのです。

アフリカ生まれのライオン〝ボス〟は、しきりに故郷をなつかしがるのでした。

「まあ、こうやって子どもたちと遊ぶのもわるくはないけどね、やっぱりアフリカの大草原はいいぜ。近ごろ、ときどき夢を見るんだ。風にふかれて、のんびりと昼寝する夢さ……。」

ボスは、わたしが自分の手で、アフリカから日本に連れてきたライオンでした。おとなしく気だてのやさしいボスは、子どもたちの人気者です。ボスとそんな話をした夜は、わたしも、きまってアフリカの草原でボスと昼寝している夢を見たものです。

真夜中ですから、おおっぴらに話しかけて動物たちの安眠を妨害しては、なんにもなりません。わたしは、そっと近づいて寝顔をのぞきこみます。かれらは、もうなれていますから、めんどうくさいときは、ちょっとうす目をあけて「おやすみ……。」のあいさつをするく



チータの赤ちゃんとヒゲさん

らいです。わたしもあいさつを返して、ゆっくりその場を立ちさるというわけです。

タヌキの〝ポン太〟のおりに近づくと、どうやら興奮しているようすです。

タヌキは、もともと夜行性の動物ですから、人間のように何時間も熟睡するわけではないのですが、それにしても、その夜は、少々おちつかぬようすなのでした。

「ポン太、どうした？　なにかこわい夢でも見たのかい……。」

ポン太は、わたしの声に、いっそうおどろいたようで、ぐぐっと後ずさりしながら、ひとみをこらして、わたしのほうをのぞいていましたが、やがて近づいてくると、

「ぼくは明るいところが苦手なんだ。その懐中電灯を消してよ。」

これはわたしも、うっかりしていました。夜の見まわりのとき、わたしは、いつもすこ

し明るい懐中電灯を持ち歩いていたのです。

「ごめん、ごめん。さあ消したよ。おちつかないのなら、ちょっと話をしようよ。どうしたんだい？」

ポン太は、それでも、はじめ、うろうろとおりの中を歩きまわったりしていたのですが、そのうち、ややおちつきを取りもどし、わたしの目の前にちょこっとすわりこむと、あごを前足にのっけるポーズをとって、鼻のあなから大きなため息をはきだしたのでした。

「昼間さ、子どもたちにからかわれたんだよ。わんぱくそうなチビスケが一人いてさ、背中の毛を引っぱったり、尾っぽをつかんだりしてさ——。べつに、いたいってわけじゃないけど、とっても気持ちがわるいんだ。知ってるでしょ。やさしくなでられると、いい気持ちになってねむくなるんだけど、あんなことされると、がまんできないくらい気持ちがわるくなるってことを——。」

そうだったのか……。

*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb